

モードは語る

中野 香織

変化生む挑戦を映画化

サステナブル（持続可能な）ファッションは今や常識である。そうでなければ許されない程の圧力の下、申し訳程度に一部のみにサイクル素材を使っている服も少なくない。

それほど支配的になった概念だが、この方向に流れを変えるためデザイナーが根本的な挑戦を始めたのは2017年。当時のファッション業界は理想から大きくかけ離れていた。

大量生産される安価な商品の背後には、低賃金労働や児童労働の横行があり、環境汚染、動物虐待、莫大な二酸化炭素（CO₂）排出などの



エイミー・パウニー氏（右端）の奮闘ぶりを描く©2022 Fashion Reimagined Ltd

様々な問題が山積。毎年作られる服の数は兆単位なのに、その5分の3が購入した年に廃棄されていた。

持続可能なファッション

そんな慣行を壊すため、一人の情熱的な女性が行動を起こした。ロンドンのブランド「マザー・オブ・パール」のクリエイティブ・ディレクター、エイミー・パウニーは、英国最優秀新人デザイナーに選ばれた賞金10万ポンドを元手に、このブランドをサステナブルに変える「No Frills」（飾りは要らない）コレクションを立ち上げることを決意する。

その奮闘ぶりを描いたドキュメンタリー映画「ファッション・リイマジン」が9月、日本でも公開される。エイミーと商品開発のクロエは、

理想の綿とウールを求めて、ペルー、ウルグアイ、オーストラリアへと旅をする。素材の産地を特定することすら難しいうえ、産地それぞれの商習慣の壁に阻まれたり納期の問題があったりと、一筋縄ではいかない。エイミーらの旅を通して、観客は初めて知る現実を突き付けられる。

映画は暴露話に終わらず、難関をひとつずつクリアしていくエイミーと産地の人々との交流を、愛にあふれたロードムービーのように描く。観客に感動と希望を与え、結果として行動を変えることを促している。

服を選ぶことは、地球の裏側の農業や牧羊業のことまで想像し、社会的責任を負うことでもある。そんな時代になっている。